



ESCO News Letter

第2巻 第13号

発行日 2013年7月31日

ダニと感染症

私たちの生活環境にはたくさんのダニが生息していますが、ダニは時としてウイルス、リケッチア、細菌などの病原体を媒介して人に重篤な感染症を引き起こすことがあります。最近では、今年1月にSFTSという新興感染症の発生が国内で初めて確認されましたが、その

原因であるSFTSウイルスは、私たちの周りにもいる一般的なマダニが媒介することが明らかとなり、注目されたことは記憶にも新しいところです。時として今なお脅威であるダニですが、ダニと医学の関係を専門的に研究する民間の新たな施設が開設されました。



この号の内容

馬原アカリ研究所 - 訪問してきました - 1

国内に知られるヒトのダニ媒介性感染症 2
重症熱性血小板減少症候群(SFTS)

発生地分布 3

馬原院長の推奨するダニ対策

「馬原アカリ医学研究所」 - 訪問してきました -

徳島市から車で南に約1時間。JR新野駅に近いところに白と青を基調にした現代風の建物が目にとまります。昨年(2012年)7月、徳島県阿南市新野町に開設された「馬原アカリ医学研究所」(Mahara Institute of Medical Acarology)です。

世界的発見! 「日本紅斑熱」

この施設を立ち上げたのは、近くで医院を営む馬原文彦院長です。1980年 無医地区であったこの地に医院を開設し、初志であった地域に根付いた診療をめざし、毎日地域の患者さんと向き合っていました。

ある日、高熱と発疹を示す患者さんが来院しました。しばらくして同じ症状の患者さんがもう一人来院しました。二人とも山でダニに刺されたとのことでしたが、今までに経験したことのない経過をたどることから医師会に相談し、専門機関と検討を重ねました。その結果、二人は当時(1984年)日本には存在しないとされていたダニ媒介性紅斑熱群リケッチア症と診断しました。その後、病

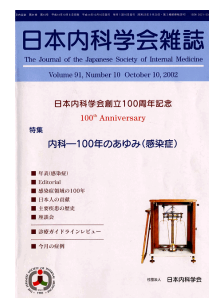
原体リケッチア(後に *Rickettsia japonica* と命名)が分離され、1987年 この感染症を「日本紅斑熱」(Japanese spotted fever)と命名しました。

「Emerging Infectious Disease」に日本人として初めて執筆

世界的な発見の後にも初志は揺るぐことなく地域の患者さんと向き合う毎日でしたが、その傍らで研究にも精神的に取り組みました。研究発表数は実に300報を超えています。国内の学会、研究会、さらには国際学会でも注目され、各地での講演も精力的にこなし、日本紅斑熱診療の普及啓発に努めました。1997年には米国疾病対策センター(CDC)の専門誌「Emerging Infectious Disease」に日本紅斑熱の概説を日本人として初めて執筆し、また2002年に発行された日本内科学会雑誌の特集・内科100年のあゆみでは、顕著な功績があった研究者8名の中に、北里柴三郎、志賀潔、野口英世らと並んで選ばれています。



モダンな馬原アカリ医学研究所前にて
(塩本(筆者)、山形(弊社専務)、馬原院長、藤田所長)



日本内科学会雑誌



研究所の室内(付属「ダニの資料館」)

生態や役割がわかっているのはわずかな種類

日本紅斑熱の病原体はダニによって媒介されますが、昔から日本に存在するつつが虫病も同様です。他にもダニが媒介する感染症はたくさんありますが、ダニを専門とする研究室や研究者は最近少なくなっており、このことに危機感を抱いた馬原院長は、自ら研究施設を立ち上げることを決意しました。医院の近くに施設を確保し、研究器材を整えながら、そこにはダニ研究の第一人者であり、30年来研究を共にしてきた藤田博己博士を所長として招き、昨年

7月、念願かない二人そろっての新しい研究活動がスタートしました。藤田所長は「私たちの周りにはたくさんの種類のダニが生息しているが、生態や役割がわかっているのはわずかです。人と自然が共生するために解決しなければならぬことはたくさんあり、むしろこれからです。感染症の発症にも深く関わっており、この関係解明もますます重要です」と静かに話します。研究所には「馬原ダニの資料館」(Mahara Medical Acari Museum)も併設、一般公開し、市民や子どもたちが学習する機会も大切にしています。

国内に知られるヒトのダニ媒介性感染症

	疾患名	病原体
マダニ	リケッチア 日本紅斑熱 ヒトアナプラズマ症 Q熱(コクシエラ症)	<i>Rickettsia japonica</i> <i>Anaplasma phagocytophilum</i> <i>Coxiella burnetii</i>
	細菌(ア) 野兔病(ヤト病、ツラレミ) ライム病	<i>Francisella tularensis</i> <i>Borrelia afzelii</i> , <i>Borrelia garinii</i>
	ウイルス ダニ脳炎 重症熱性血小板減少症候群	Flaviviridae科 <i>Flavivirus</i> 属 Bunyaviridae科 <i>Phlebovirus</i> 属
	原虫 ヒトバベシア症	<i>Babesia microti</i>
ツツガムシ	リケッチア つつが虫病	<i>Orientia tsutsugamushi</i>



つつが虫病を媒介するツツガムシ



(フタゲチマダニ刺咬例)
日本紅斑熱やSFTSを媒介するマダニ類

重症熱性血小板減少症候群 (SFTS)

開設から半年、施設の運営や研究が緒に就きかけた今年(2013年)1月SFTSという感染症の発症が国内で初めて確認されました。中国では2009年頃より発症が報告されていましたが、2011年に原因ウイルスが初めて特定された新興感染症(Emerging Infectious Disease)です。正式病名は、「重症熱性血小板減少症候群(Severe Fever with Thrombocytopenia Syndrome: SFTS)といい、日本ではこれまで(2013年7月2日現在)に26人の患者さんが報告され、その内の11人が死亡

しています。

この感染症の原因はSFTSウイルスですが、この病原体も、私たちの周りにはごく一般的なマダニによって媒介されます。新しい感染症であること、死亡率が非常に高いこと、そして一般的なマダニに因って感染することなどから多くの注目を集め、研究所には全国からたくさんの問い合わせが相次ぎ、専門誌やマスコミの取材も後を絶たない状況が続いています。今後は国立感染症研究所と一層の連携を深め研究を進めたいとのことです。

先ずは知ることがあなたを守ります

厚生労働省は、SFTSを今年3月に感染症法の四類感染症に指定し警戒を強化しましたが、同時にSFTSの制圧に向けた総合的研究もスタートさせました。その研究協力者に馬原院長、藤田所長も招聘されています。

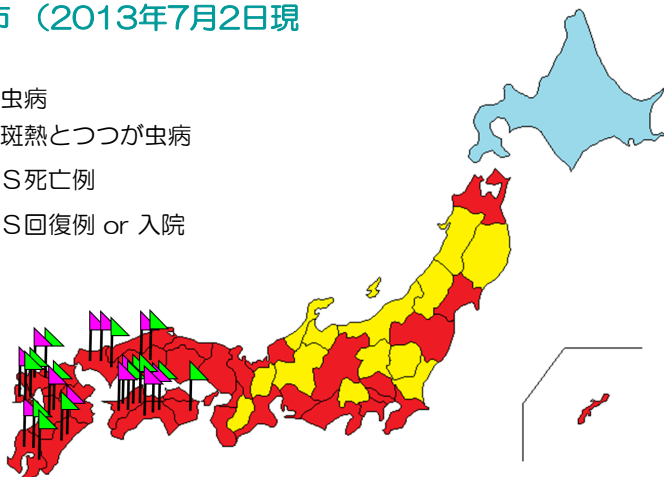
ちなみにSFTSの14例目は今年5月に徳島県で確認されましたが、主治医、医師会、行政の連携により早期に対応することができ、患者さんは良好に経過し15

日で軽快退院できました。またそのときに刺咬していたフタトゲチマダニは生体で採取され、産卵し継代されており、今後SFTSウイルスの経卵伝播などの研究解明が期待されています。

馬原院長は、「ダニは日本紅斑熱や今話題のSFTSなどの病原体を持っていることがあります。ヒトの側でもしっかりした知識を身につけ、病原体をもらわないように気を付けましょう。先ずは知ることがあなたを守ります」と話します。

発生地分布（2013年7月2日現

- つつかが虫病
- 日本紅斑熱とつつかが虫病
- SFTS死亡例
- SFTS回復例 or 入院



おわりに

研究所名の“アカリ”とは、学名(ラテン語)でありダニのことです。優しい響きであり、将来を連想させます。日本紅斑熱を発見した自然豊かな地で、小さなダニと向き合い大きな役割を果たそうとする執心の研究所です。私たちアース環境サー

ビスは、お二人の先生にはこれまで衛生害虫対策や人獣共通感染症対策についていろいろご指導をいただいてまいりましたが、今後共にご教示をいただきながら、人々の健康、安全、安心を支援すべく、私たちの役割をしっかりと担っていきたいと考えています。

病原体を
もらわない
ために！

■ 馬原院長の推奨するダニ対策

刺されないように！

夏はダニが活発になる季節、ダニに刺されないようにしましょう。山や草地に行くときは、長袖、長ズボンを着用するなど、肌をできるだけ露出させないように工夫しましょう。

付着・刺し傷をチェック！

山や草地に行った後は、お風呂などで皮膚にダニが付着していないことをチェックしましょう。

心配があれば病院に！

皮膚にダニが付着していたり、疑わしい症状（発熱、発疹、嘔吐、下痢）がある場合は、速やかに医療機関に行き診察を受けましょう。

日本紅斑熱を媒介するマダニ



ヤマアラシチマダニ♀



フタトゲチマダニ♀



キチマダニ♀

本紙に掲載の資料は、馬原アカリ医学研究所より提供されたものです。

アース環境

総合環境衛生管理で
社会に貢献します

無断複写・複製はご遠慮下さい。

本件に関するお問い合わせは、
03-3253-0640

ホームページもご覧ください

<http://www.earth-kankyo.co.jp/>